

2020. 9. 27. 聖霊降臨節第18主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書13章31-35節

『神の示す道を行く』

もう40年以上前になりますが、アメリカで「ジーザス」という映画が公開されました。イエス・キリストの生涯を描いた映画です。ジョン・ヘイマンという監督が制作したのですが、この映画には一つの特徴がありました。それはこの映画が「原作；ルカによる福音書」と銘打った作品で、ルカによる福音書に忠実に主イエスの生涯を描いた映画だったということです。四つの福音書を組み合わせて主イエスを描く作品は多いのですが、「ジーザス」はルカ福音書にのみによる作品で、それだけにとっても興味深い、ルカ版「ジーザス」になっている映画でした。

その映画が日本でも公開されてしばらくたったとき、教会の中で、その映画を見た者がそれぞれ感想を述べ合うということがありました。そのうちの一人が、本当にルカ福音書に忠実に映像化したイエス・キリストを見て、残忍だった、むごい死で、痛々しく、おかawaiiそうだった、という感想を話したのが話の始まりでした。実際映像で見る十字架は陰惨で残忍なのです。

ひとしきり痛々しいとか、おかawaiiそうだという話が続いた後で、別の人が「でもかわいそう、というのは要するに他人事だよ」とぼつりと言ったのです。主イエスの十字架を見て、かわいそうと思う自分は他人事としてそれを眺めている自分だと言い出したのです。要するに観客なんだということです。

ある人の苦しみを、かわいそうと思うことは普通にあることでしょう。しかし、それがたんに「かわいそう」だけにとどまらない、別の感情が出てくることがあります。例えば、大きな災害のあった被災地に、自分の知り合いや家族がいるという場合、ただ「かわいそう」というようなことだけでは済まない。観客の位置に留まらせない、ということがおこるのです。

十字架に向かう主イエスを「かわいそうに」とみる視線は、観客席からの視線なのでしょう。十字架が「わたしのため」の出来事なのだ、という視点がなければ、十字架は「かわいそうな話」で終わってしまうのかもしれない。

主イエスが十字架にかかる時、十字架を背負わせて処刑場に行く途中、それを見ていた女性たちが嘆き悲しんでいました。すると主イエスはその女性たちに向かって、「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ自分と自分の子供たちのために泣け。」と言われたのでした。わたしのために泣くな自分自身のために泣け。十字架が、他人事の間は、「おかわいそう」で涙が出る。しかし、十字架が、自分のため、自分が負うべきものであるにもかかわらずキリストが「身代わり」となって負ってくださっている、ということに気づいたとき、キリストを十字架にまで架けてしまうわたしの罪の深さを思って、自分自身のために泣く。同時に、この自分のために十字架にかかってまで私を救ってくださるキリストの愛に泣くのです。

ルカ福音書9章には、「イエスは天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」という言葉が記されていました。ご自分が十字架にかかるため、エルサレムに向かう、その意志をいよいよ鮮明にされた、ということです。今読んでいる13章も、主イエスのエルサレム行きの途上です。

ある時ファリサイ派の人々が主のもとに来て、「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています」と耳打ちしたのです。なぜこんなことを言ってきたのか。ファリサイ派は主イエスの味方ではないけれど、敵でもない、という微妙な立場だったのかもしれませんが、もちろん何かあれば、すぐに主イエスを糾弾したりもするのですが、ここではそうした微妙な立場で、イエスに進言している。すると、主イエスはファリサイ派に向かって「行ってあの狐に、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気を癒し、三日目にすべてを終える』とわたしが言ったと伝えなさい。だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない」と言われました。

主イエスのエルサレムに向かう意思が強く語られている言葉です。もう少し原文の感じを出すとすれば、「行って、あの狐に言え。見よ、わたしは悪霊を追い出し、癒しを貫徹する。今日も明日も。そして三日目も全うする」自分のなすべきことを貫徹する、全うすると重ねて言われ、その上さらに、自分の道を進まねばならない、と言われるのです。自分の道とは、自分の思い描く道というのではなく、神によって示され、神が導かれる道のことです。

エルサレムに向かう。しかしそこには主イエスに対し、殺意を持って狡猾に

待ち構えているヘロデがいる。だが、主イエスの意思はひるまず、十字架にまっすぐに向かっている。悪霊を追い出すとは、神と人間との関係を分断させようとする悪霊の働きを退けるということです。もっと言えば、神と人間との関係を回復させるために、主イエスはこの道を貫徹していく、歩いていく、そう語っておられる。人間が罪によって損なった神との関係を何があっても回復する。それを貫徹する。主イエスの熱い、熱情のこもった発言です。それだけに雌鶏が雛を羽の下に集めるように語りかけても応じようとしない人々に対する嘆きが主イエスの中にはあった。 34 節 35 節の主の言葉は、先週の聖書箇所「お前たちがどこの者か知らない。立ち去れ」という言葉と同様、裁きの言葉ではなく、悔い改めを求める言葉です。十字架があなたの救いの出来事だということを信じて受け止めてほしい、という思いが込められた言葉です。それは、この道を貫徹して歩いていくという主の意思と表裏一体となった言葉です。

けれども、今この場面にいる人々は、主イエスの強い意思を受け止めてはいない。エルサレムなど行かずに、立ち去ったほうがいいですよと賢しらに助言する人たち。なぜイエスは自分に殺意を抱いているヘロデのいるエルサレムにわざわざ行くのか、そう思ってそれを観客のように見ている人たち。わけが分からず、ただ傍観している人たち。主イエスの周りには、そうした人たちが群れるように取り囲んでいました。誰もこの時、主イエスの熱い意志を受け取ろうとはしていない。そもそも主が十字架にかかれるのは、自分のため、この自分の身代わりとして、処刑を受けられる、ということが全く分かっていない。

しかし、それは主イエスの周囲の人たちが特別不信仰だったから、というようなことではないでしょう。事実主の弟子たちも、「身代わり」としての死というようなことを全然受け止められず、主が十字架にかかる前に逃げ去っていき、ペトロも十字架が自分の「身代わり」の処刑だとは全く思っていなかった。

いったい誰が、キリストの十字架がわたしのための「身代わり」だと信じて受け止められるのでしょうか。

エフェソの信徒の手紙の2章にはこういう意味のことが記されています。「あなた方が救われたのは、イエスの身代わりの死と復活という恵みによるのです。それは、あなた方が自分の努力で獲得したものではなく、神からのプレ

ゼントです。人間の行いによって得るものではありません。恵みにより、信仰によって救われたのです。」つまりわたしたちの信仰の核心には、イエス・キリストの身代わりとしての十字架の死と復活という神からのプレゼントをただ受ける、ということがあるのだ、ということです。身代わりの死、十字架の愛それはわたしたちの中から出てきたものではありません。わたしたちの経験の中にもない。だから実感とか、経験知でわかることでも感じられることでもない。

わたしたちがこれを受けるとするなら、ただイエス・キリストの歩みに目を凝らす以外にはない。イエス・キリストがこの世に生まれて、神の国の福音を宣べ伝え、弟子を招き、ともに歩み、悪霊を追い出し、癒しの業をなさり、前に立ち塞がろうとする者たちにも臆せず、十字架に向かう歩みを貫徹し、全うする。そこにあるのは、愛です。神の御心としての愛をキリストご自身が受けて、愛においてこの道を行く。身代わりの死も、十字架もこの愛において結実したことです。

わたしたちが福音書を読むということ、それは福音書の言葉によってキリストの愛に出会うということです。どういう形であれ、イエス・キリストの言葉業、歩み、その一つ一つを通して、全部を通して、愛に出会うということです。その愛は、わたしたちが自分の生活の中で知る愛、親の愛、夫婦の愛、人間関係の愛と重なりつつも遥かに超えている。遥かに超えているから実感では遠く及ばない。しかし、その愛に触れることで、わたしたちは神の愛の中にいることを知るのです。キリストの十字架へと向かう愛の中にいる自分を知るのです。それが大事なのです。

キリストの愛に出会い、触れ、その愛の中にいること、十字架の愛の中にいる自分を受けとめて、歩んでまいりましょう。